

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	遠藤周作『死海のほとり』における「美しい世界」の意味：フランクフル『夜と霧』を手がかりに
Author(s)	倪, 楽飛
Citation	近代文学試論 , 55 : 1 - 12
Issue Date	2017-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/49038
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049038
Right	
Relation	



遠藤周作『死海のほとり』における「美しい世界」の意味

— フランクル『夜と霧』を手がかりに —

俣 楽 飛

はじめに

遠藤周作『死海のほとり』（新潮社、一九七三年六月）初刊本の巻末にある「あとがき」にかえて¹⁾には、次の説明文が付されている。

ゲルゼン収容所の記述にあたっては、さまざまな文献を参照したが、本文三一六（引用者注・全集一九八頁）頁の四人の「世界はどうして、こう……美しいんだろう」という言葉は、フランクルの『夜と霧』に報告されているものである。

この記述から、少なくとも二つの意味が読み取れる。一つは、収容所の同伴が惨死した現実を前にして、自然の「美しさ」に対する賛嘆を漏らすという強制収容所における「不条理」は、作者の想像力による捏造ではないことである。そしてもう一つは、『死海のほとり』中の「世界はどうして、こう……美しいんだろう」という言葉を理解するために、フランクル『夜と霧』における「美しい世界」に関連する言説は非常に重要な手がかりになることである。先行研究において、この点に着目し、『死海のほとり』と『夜と霧』との関連性を指摘した論は少なくない。²⁾

しかし「美しい世界」という言葉の表現のレベルを超え、言葉を支えるフランクルの思想や理論に分析の矛先を向けた考察は、筆者の調査した限り、未だなされていないようである。

ヴィクトール・エミール・フランクルは、ナチスの強制収容所における体験を記した『夜と霧』³⁾で世界的に名を知られている心理学者兼精神科医であるが、その研究の集大成は、彼が創始した精神療法、「ロゴセラピー」である。これは実存分析による意味療法であり、ジークムント・フロイトの精神分析とアルウレッド・アドラーの個人心理学に続き、「第三ウィーン学派理論」とも呼ばれている。ロゴセラピーを解説するフランクルの代表作に、『識られざる神』⁴⁾、『医師による魂の癒し』⁵⁾、『制約されざる人間』⁶⁾、『人間とは何か』などが挙げられる。現時点のロゴセラピー研究は、心理学を除けば、教育学や社会学に限られている。文学研究においては、フランクルの著書から影響を受け、文芸研究の中に「人間の魂」⁷⁾に関わる「死と愛」の真実を求める研究が潜流⁸⁾しているが、ロゴセラピーを全面的に取り入れ、近現代日本の文芸作品を読解する先行論はほとんど見当たらず、新たな試みを行う余地や意義があると思われる。

また一方で、遠藤は作品を通して現代人の救済を試みようとする小説

家である。それに対して、フランクルはロゴセラピーを実践してクライアントを意味のある人生へ導こうとする医師である。両者は、「アウシユヴィッツ以降」の時代に生きる我々が、如何に不合理や空虚に満ちた人生に救いを見出せるかという大きな問いで響きあっていると考えられる。

そこで本稿では、まずフランクルのロゴセラピーとは何かを簡単に説明する。次に、フランクルの思想を考慮しながら、『死海のほとり』における「美しい世界」という言葉の意味を再確認してみる。その上で、『巡礼』の章において、この言葉を目にした主人公「私」にとつて、「美しい世界」はどのような響きがあるのかを分析する。最終的に、遠藤自身にとつての「美しい世界」、及び『夜と霧』の持つ意味を考えてみたい。

一、ロゴセラピーとは何か

『心理療法事典』⁽⁸⁾の解釈によれば、ロゴセラピーの「ロゴ」は、ギリシヤ語で「言葉」「意味」を表す「logos」に由来する語であり、通常は「ロゴス」で表記する。「ロゴセラピー」は「人生には無条件に意味があり、心理療法の第一の課題は患者が自分の人生の意味を発見できるように手助けすることにあるという前提に基づいている」。基本的に、ロゴセラピーは「意志の自由」、「意味への意志」、そして「人生の意味」という三つの概念を理論の最も根本的な支柱としている。

具体的に、「個人の意志の自由は常に環境や人生の物理的・心理的状态によって制限されているが、にもかかわらず、個人はいつも『自分が

直面するいかなる状況に対しても態度を決定する』自由を持っている」という。続いて、他の心理療法システムに見られる還元主義的・決定主義的傾向に反撃し、フランクルは個人の最も根本的な欲求はフロイト派が主張する「快楽への意志」でもアドラー派が唱える「力への意志」でもなく、自分の人生を意味に満ちた人生にしたいという「意味への意志」であると示唆している。そして、「人生の意味」は何かという究極な問題は一言で答えることができないが、人は「経験価値」「創造価値」及び「態度価値」を実現することでその意味を直観することができる。

フランクルは、一九〇五年ウィーンに生まれ、ウィーン大学でフロイト、アドラーに師事し、精神医学を学んだ。一九三三年からウィーン精神病院で少壮の精神医学者及び主任医師として囑目されていた。一九四二年、ユダヤ人であるというだけの理由で、フランクル一家は逮捕され、チェコのトレージエンシュタット収容所に送られた。そこで、フランクルの両親、妻テイリー、そして義理の母が皆死亡した。フランクル自身は一九四四年一〇月にアウシユヴィッツに送られ、三日後にテュルクハイムに移送され、一九四五年四月にアメリカ軍により解放された。ウィーンに戻った後、家族を失った失意の中で、フランクルは収容所に送られる前から構想し始めたロゴセラピーの理論書『医師による魂の癒し』を執筆。また翌年の一九四六年に、わずか数日で、収容所における体験に基づいた伝記的報告書『夜と霧』（原題『一心理学者の強制収容所体験』）を完成した。この作品はフランクルの思想の原点というより、むしろ彼のロゴセラピーの実践を記したものであるというべきである。

『夜と霧』の中に「ロゴセラピー」という言葉そのものは特に出てこないが、感動的な力を持つ文章を支えているのは、まさにロゴセラピーの

理論にほかならない。

さて、次節では、その理論を考慮に入れながら、『死海のほとり』の中に引用された『夜と霧』の言葉がどのような役割を持つのかを確認する。

二、「世界はどうして、こう……美しいんだろう」

『死海のほとり』において、ナチス強制収容所の状況に関する具体的な描写の他に、「世界はどうして、こう……美しいんだろう」という言葉は、本作品と『夜と霧』との一番直接的な接点であると言っても差し支えない。この言葉は〈巡礼〉の章の主人公「私」に宛てた、ヤコブ・イーガルという医師の手紙に出てくるものである。この医師は、収容所にいた時、「ねずみ」と呼ばれるポーランド人修道士コバルスキと親しく、彼の最期を見届けた人物である。手紙のこの箇所においては、マデイ神父の自己犠牲が語られている。

手紙によると、その日、ある囚人がバラックから脱走したが、親衛隊に捕まえられ、これから見せしめのため飢餓室に連れて行かれ、そこで死ぬ運命となる。どうすることも出来なかったその時、「囚人の列から眼鏡をかけた誰かが離れて」、「拳を口に当てて咳をしながら、背広の独逸人と親衛隊の将校に脱走者を指さして何かを話しかけてい」るのを医師たちは目撃した。「やがて彼は二人に連れられて、ゆっくりとその場から姿を消しました」。

その日の夕暮、我々は今朝の目だたぬ出来事が何だったのかを知り

ました。独逸人に話しかけた眼鏡の囚人はマデイという神父で、自分を身代わりに飢餓室に入れ、代りに脱走者を助けてくれと申し出たというのです。

この話を次に聞いた囚人たちの表情は別に変わりませんでした。しかし、その夕暮れ、バラックの窓から鉛色の空が割れて、漸く暗い燃えるような空がのぞき、そこから幾条かの光が有刺鉄線に囲まれた荒涼とした建物と監視塔にふり注いだ時、我々はそれぞれの中で、今、飢餓室にいるマデイ神父のことを考えていました。囚人の一人が、その時、呟いた言葉を私は忘れません。世界はどうして、こう……美しいんだろう、と彼は言ったんです。(一九七―一九八頁) (傍線は引用者による。以下同じ)

この箇所に関して、上総英郎氏は、遠藤の「自然描写の中に一神教的秩序が暗示され、この汎神論的な言葉が不思議な宗教性を帯びてひびくことに注意する必要がある」と指摘し、また、「モーリアック的に言えば、自然描写の内に恩寵が歴然にあらわれていると言えるだろう」と述べている。フランクフル『夜と霧』との関連性に注目し、言葉の異同を比較して分析した先行論に、篠崎まどか氏の論と菅原とよ子氏の論が挙げられる。篠崎氏は、囚人が呟いたこの言葉の向うに、「遠藤の〈神の愛〉を表象するための意図」があると指摘し、「従ってこの言葉は、神の存在を(…)自然美に託し、その中で人間が起こした『奇跡』に感動した囚人が、その背後に神からの働きかけを感じ、人間『世界』の『美しさ』を目の当たりにして口をついて出た言葉である」と述べている。遠藤がこの言葉を通じて「神の愛」を示したという点において、菅原氏も同じ

考である。それに、『死海のほとり』に引用した『夜と霧』の言葉の背景が典拠のそれと異なっていることも菅原氏によつて指摘されている。

確かに、『夜と霧』の中では、囚人たちは「西方の暗く燃え上がる雲を眺め、また幻想的な形と青銅色から真紅の色までのこの世界ならぬ色彩とをもった様々な変化をする雲を見」ていた。そして「収容所の荒涼とした灰色の掘立小屋と泥だらけの点呼場」にある水溜りに映っていた燃える空を眺め、感動のあまりに、誰かが「綺麗な世界」と呟いたのである。それに対して、『死海のほとり』では、マデイ神父の自己犠牲という「人間の奇跡」は、夕暮れ的美景そのもの以上に、囚人が発した「美しい世界」の感嘆に深遠な意味を持たせたといえよう。しかし、両者の関係はそれだけなのだろうか。

『夜と霧』のこの章「四 非情の世界に抗して」において、フランクルが説明しようとするのは、強制収容所の囚人たちは「内面化への傾向」、つまり内なる精神の世界に意味を見出すことを通して、自分を囲い込む「非情の世界」に抗し、現実の様々な肉体的や心理的破壊から、精神の自由や健全を保っている、という現象である。囚人の「綺麗な世界」を賛嘆することはまさに一種「内面化への傾向」の形である。その他、フランクルはまた「内面化への傾向」に、具体的な労働に没頭すること、「自分の中にもっている愛する人間の精神的な像を想像して、自らを充たすこと」、そして「ユーモアな態度」で収容所生活を見ることが挙げられている。これらはそれぞれロゴセラピーの理論体系において、「創造価値」、「経験価値」及び「態度価値」に対応し、自然の美しさに感動することは「愛する人間の精神的な像を想像」することと同じく、「経

験価値」に属する。簡単に解釈すれば、如何なる状況の中に置かれていても、人は世界（他者）に何かを与えることで、或は「真善美」を体験することで、また或は自分の態度を決める自由を実現することで、人生の意味を見出すことができる、ということである。¹³⁾

以上の説明を踏まえれば、『夜と霧』における囚人が呟いた賛嘆が、自然の美に対する究極の体験を通して、人生の意味を見出した瞬間の感動を表していることは明快であろう。生地獄のような強制収容所の中で、毎日の生活は人々を命の限界まで追い詰めている。しかし、この世界は灰色だけではなく、荒涼とした建物だけでもない。「この世ならぬ色彩」をもった雲が絶えずに変化する夕暮れの絶景を眺め、世界の美と一体になるような経験が、一瞬だけかもしれないが、囚人たちに人生は意味に満ちていると感じさせるのである。「綺麗な世界」はその為に、文字通りの意味を超えて、「それでも人生に意味があるのだ」と響いているように聞えるのである。

また、自然や芸術の美を体験することと同じように、偉大なものに、或は人に対する愛を体験することによって、人生の意味への欲求を満たすことができる。『それでも人生にイエスという』¹⁴⁾の中で、フランクルは次のように言う。「ある特定の人を目の前にして心を捉えるあの感情、言葉で表現すると、『こんな人がいるだけでも、この世界は意味を持つし、この世界の中で生きている意味がある』とでもいいいたくなるような感情は、誰もがよく知っています」と。収容所で過酷の労働が強制されたフランクル自身にとって、そのような「特定の人」は正に彼の妻ティリーであった。『夜と霧』の中で、フランクルは次のように語っている。真冬の寒さを耐えながら、「作業場」に行進せねばならないある早朝、

疲れ果て、絶望に陥りかけているフランクは、目の前に「妻の面影が立ったのであった」⁽¹⁵⁾。

そして私の精神は、それが以前の正常な生活では決して知らなかった驚くべき生き生きとした想像の中でつくり上げた面影によって満たされていたのである。私は妻と語った。私は彼女が答えるのを聞き、彼女が微笑するのを見る。私は彼女の励まし勇気付ける眼差しを見る―そしてたとえそこにいなくても―彼女の眼差しは、今や昇りつつある太陽よりもっと私を照らすのであった。その時私の身をふるわし私を貫いた考えは、「…」すなわち愛は結局人間の実存が高く翔り得る最後のものであり、最高のものであるという真理である。私は今や、人間の詩と思想とそして―信仰とが表現すべき究極の極みであるものの意味を把握したのであった。愛による、そして愛の中の被造物の救い―これである。たとえもはやこの地上に何も残っていないなくても、人間は―瞬間でもあれ―愛する人間の像に心の底深く身を捧げることによって浄福になり得るのだということが私に判ったのである。収容所という、考え得る限りの最も悲惨な外的状態、また自らを形成するための何の活動もできず、ただできることと言えはこの上ない苦悩に耐えることだけであるような状態―このような状態においても人間は愛する眼差しの中に、彼が自分の中に持っている愛する人間の精神的な像を想像して、自らを充たすことができるのである。天使が無限の栄光を絶えず愛しつつ観て浄福である、と言われていることの意味を私は生まれて始めて理解し得たのであった。

妻への限らない思いは愛するその人と共にいられる強い実感と化し、「私」の心を慰めた。かくして、「偉大なものに、或はある人に対する愛を経験すること」で、自分を困んだ絶望的な「灰色」と闘い、「全く慰め無き意味なき世界を乗り越え」て、思わず「*let Lux in tenebris luce*」(光は闇を照らしき)⁽¹⁶⁾と唱え出したこのフランク自身の体験談は、遠藤周作に極めて強烈な感銘を与えたに違いない。『死海のほとり』において、遠藤は上手く「自然の美」及び「偉大なるもの」(＝神)に対する二つの究極の体験を、「世界はどうして、こう…：美しいんだろう」という一つの言葉に注ぎ込み、一見救いのない強制収容所生活の中にも、人生の意味を見つけたという感動を表しているのではなからうか。関連箇所を見てみよう。

テル・デデツシュのキプツで聞いたCの証言によれば、マデイ神父が飢餓室に入れられた日の夜、バラックの中で一つの祈りが囚人の間に広がっていった。その祈りは「人々は彼を蔑み、見棄てた。忌み嫌われる者のように、人々に侮られる。虐げられ、苦しめられたけれども、彼は口を開かない」という、旧約聖書「イザヤ書」の中の一文である。預言者イザヤ(紀元前八二九年〜七一七年頃)はここで、メシア(キリスト)が地上に現れる時の様子を預言したといわれている。言うまでもなく、この祈りを唱えている囚人たちの心の中で、自らを犠牲にしたマデイ神父は全ての苦しみを背負ったキリストと重なり合っているのである。マデイ神父は絶望のどん底に陥っている収容所の囚人たちに、希望の光を示してくれた。そして、その光が闇闇を照らした瞬間、麻痺した感情に包み込まれている囚人たちは、「神は我々と共にいるのだ」という感動

が抑えきれず、遂に「世界はどうして、こう……美しいんだろう」と呟き出したのだ。

「世界はどうして、こう……美しいんだろう」。——『夜と霧』から借用したこの言葉のなかに、遠藤の持つフランクルの思想に対する深い理解が秘められているといえよう。確かに、「美しい世界」の呟きを通じて、遠藤は「神の愛」を示している、という点において、篠崎氏と菅原氏の論は的確である。しかし、言葉の更なる背後には、また「神の愛」と「人生の意味」との緊密な繋がりがあり、まさにその繋がりの中に、「巡礼」の主人公「私」にとつての「本当の救い」を解明する重要なヒントが潜んでいると思われる。次節ではそれについて分析してみたい。

三、「私」にとつての「救い」

「美しい世界」が出てきたイーガル医師の手紙を読んでいた「私」にとつて、この言葉はどのように響いているのか。これを解明するにあたって、「私」の今までの心的遍歴を辿っておく必要がある。

幼い頃から親の意志でキリスト教の洗礼を受けた「私」は、教会で教えられたイエスの愛を受け入れられず、次第に教会に行かなくなつた。二十数年前に第二次世界大戦を経験し、今では不惑の年を過ぎて、「郊外に家建て、車を買ひ、たえず版を重ねて娯楽小説を何冊か書いた」という、社会的地位や名誉を手に入れた人気小説家となっている。しかし、生活の面では何の不満もないように思われる。「私」は、実は「自分の精神的墮落を自分でよく知っていた」。物質的な豊かさや人気作家としての成功は、精神的な空虚を際立たせるばかりであり、「自分の墮落

の証明」にもなっている。宗教を棄てたことはかえって「私」の心の中で大きな穴を開けることになってしまふ。その穴を埋めようとしても、「自分がどうなるのか、何をするのか自信もなく、心の奥でこの矛盾に決着を付けねばならぬと何時も言い聞かせてきたのである」。ここで、自分の人生を支える意味を自分が持っていないことは、「私」の悩みや苦しみの種になっている、と読み取れるだろう。その悩みの中、「私」はエルサレムに行き、「この決着を今度は付けてみようという心が動いていた」。

物語の展開に従うと、「私」のいう「精神的墮落」は、この二十数年間「私」の魂を痛め続けてきた二つの負い目と繋がっていることが分かる。一つは、大学の舎監に勤めたノサック神父を裏切つて、神父を検問に來ている警察に舎監室の鍵を渡したことである。もう一つは、癲病院の患者と野球をする時、患者の手にタツチされるのを恐れ、動揺のあまりに足が竦んだことである。この二つ「思い出したくない思い出」によつて、「私」は自分も「ねずみ」と同じような「卑怯で臆病な人間」であることを思い知らされた。表面上、「私」に自分の記憶の中に封じられたこの二つの出来事は、川嶋至氏が指摘しているように、「日常感覚の次元で、容易に許せるほどのものではない」⁽¹⁷⁾かもしれない。しかし、事実の次元より更なる深い領域、つまり「魂の領域」において、これらの事件は本質的に、「私」が信仰を棄てたことと大した差がない。なぜなら、「私」が根本的に否定したのは他でもなく、「あの男」の、即ちイエスの「愛」だからである。言い換えれば、長い間「私」の魂を苦しめ、心を苛む「卑劣さ」は、イエスの「愛」を知りながらも、「卑怯で臆病」であるゆえに、その「愛」を受け入れず、重荷として拒絶し

たことである。その上、イエスの「愛」を裏切ったことこそ、「私」の「精神的墮落」なのであり、神との関係を壊してしまったこの「精神的墮落」は、決して「私」にとって簡単に許せる罪ではない。

だから、イエスの足跡を歩きなおすこのイスラエルでの旅は「私」として、「見失った」イエスとの関係を修復し、「魂の救い」を探し求めるほど重要な意味を持つ旅であると考えられる。この点について、古橋昌尚氏も同様の見解を述べている。⁽¹⁸⁾そして、古橋氏の論によれば、「私」はこの旅の目的の達成、つまり「和解」や「救い」を求めることの成否を、自分の分身を主人公とした物語「十三番目の弟子」の完成に賭けている、という。そのうえ、物語中の「歯の欠けた嘘つきの弱虫男」が「ねずみ」と重なっていることに「私」が気づいた時から、その「救い」の可能性はまた「ねずみ」の最期を確認することにも賭けられているといえよう。

しかし、テル・デデッシュのキブツを離れた時、「私」は絶望に陥り、「『十三番目の弟子』はもう書き続けることはないだろう」と思った。キブツで聞いた收容所生還者たちの証言によれば、「ねずみ」は最後まで「卑怯で臆病な人間」であった。「收容所の中にはマデイ神父のような人種とねずみのような人種がある。〔…〕ねずみ型の人間は、どうもがいてもそんな真似（自己犠牲、筆者注）はできぬ。世界には、イエスがどうしても見棄てる人間がいるのかもしれぬ」と「私」は断念した。「救い」がない、イエスとの関係の修復はできない、希望がない、「やがて自分が戻る日本での今までと同じような埃に汚れた生活が、頭に浮かんだ」。「私」のこの時の心境は強制收容所の中の囚人たちと似通っているのではないかと思われる。救いの希望のない「灰色」に囲い込ま

れ、意味のない人生に対してはやはり「自墮落」を自分の運命と思つて諦めるしかない。

その時、「私」はイーガル医師の手紙を受け取った。マデイ神父の犠牲と囚人たちの祈り、「美しい世界」の眩きを読んだ。結局「何もかも変らなかつた」のだろうか。ある日、ある囚人が倒れそうな人に自分の一日の食糧であるたった一つのコップ・パンを渡したという「一寸ちがった出来事」があったのではないか。そして、数日後、「ねずみ」が彼の最期を迎える朝がきた。⁽¹⁹⁾「膝がしらが痙攣したように震え、今にもしやがみこみそう」になる「ねずみ」は、「足元に水が流れはじめ」、恐怖の余りに「尿を漏らしていた」。そして、手紙の書き手である医師に、「ねずみ」が最後の食糧になるはずだったコップ・パンを渡した。医師の手紙が続く、「背広を着た独逸人が彼の左側に立って歩き出しました。うしろで私はじっとそれを見送っていました。コバルスキはよろめきながら温和しくついていきました。そのとき、私は一瞬——一瞬ですが、彼の右側にもう一人の誰かが、彼と同じようによろめき、足を曳きずっているのをこの眼で見たのです。その人はコバルスキと同じようにみじめな囚人の服装をして、コバルスキと同じように尿を地面にたれながら歩いています……」（二〇二頁）

言うまでもなく、「ねずみ」の側にいたのはイエスである。医師の手紙と並行して進んでいる熊本牧師からの「イエスの物語」もここでイエスの受難の場面に来ている。十字架に釘付けにされ、疲れ果てたイエスが苦しい笑顔を浮かべ、隣にいるもう一人の囚人に、「いつも……お前のそばに、わたしが……いる」と答えた。そして、現実では再びユダヤ人虐殺記念館に来ている「私」は、收容所囚人の死体で作られたといわ

れる石鹼を見て、「泣き出したかった」。

この時、「私」の「泣き出したかった」気持ちには、「世界はどうして、こう……美しいんだろう」と呟いた四人たちの気持ちと一緒であろう。なぜなら、「ねずみ」のような臆病で卑怯者でも、その人生の最後に、イエスが共にいるのであり、「ねずみ」のような「貧弱で小狡い奴」でも、最後はイエスの愛によって救われたことに、「私」がようやく気付いたからである。無論、それは「ねずみ」が飢餓室に入れられる運命を免れ、命を延ばしたという事実レベルでの「救い」ではなく、「魂の領域」において、神という「超絶的な存在」との繋がりを修復したという意味での「救い」なのである。「ねずみ」の「救い」は「私」にとっての「救い」でもあり、「私」の「魂」に照らし込み、同伴者としてのイエスの復活を宣告する光でもある。この時、「ねずみ」はマデイ神父と重なっている。弱虫と強者と、両者の背後から、常に共にいてくれるイエスの姿が浮かび上がってくる。そして、「泣き出したかった」「私」は「世界はどうして、こう……美しいんだろう」と呟いた四人たちとも重なり、「人間の奇跡」から「神の愛」を見出し、さらに「神の愛」の光を浴びる中、人生に希望があり、救いがあり、意味があるのだと再び確信できたと思われる。遂に、「私」も叫べるのだろうか、「それでも人生にイエスという」、「それでも人生にイエスがいるのだ」と。

ここまで、フランクル『夜と霧』から借用した「美しい世界」という言葉が『死海のほとり』の〈巡礼〉においてどのような響きがあるのかを確認した。『夜と霧』の中、「世界ってどうしてこう綺麗なんだろう」と呟いた四人と同じように、ユダヤ人虐殺記念館で「泣き出したかった」「私」は、人生が意味に満ちたものであると感動したことが分かる。「私」

は自分の中で、「イエス」と「人生の意味」の間に等号を付け、イエスはいつも共にいるのを実感したことで、ようやく自分の人生に「永遠の救い」を見出し、このイエスの足跡を巡る旅の目的を成し遂げたといえよう。イーガル医師の手紙に「救い」の希望が潜んでいるという物語の設定は、作者の深意を仄めかしていると思われるが、これについては後述する。

四、遠藤周作とフランクルの接点

本節では、遠藤にとつての「美しい世界」はどのような意味があるのか、また、遠藤にとつて、フランクルの『夜と霧』はどのような響きがあるのかを考えてみたい。

まず年譜的事項や関連言説から両者の接点を見るのは妥当であろう。小嶋洋輔氏の調査によると、遠藤は留仏の時すでに、一九四六年に刊行されたヴィクトール・フランクルの『夜と霧』と接していた。遠藤がフランクルについて直接言及した文章として、一九五六年「知性」一〇月号に「ヴィクトール・フランクルの『夜と霧』」という書評が挙げられる。また、遠藤は一九五六年九月一日付きの「カトリック教育」に、邦訳された『夜と霧』（霜山徳爾訳）の書評を寄せていることも、河原理子氏によって報告された。⁽²¹⁾

一九七六年十二月、遠藤はワルシャワのパックス出版社の招待を受け、ピエトウシヤックを記念した文学賞を受賞するため、ポーランドを訪れた。その便に乗ってアウシュヴィッツを訪ね、体験談を「アウシュヴィッツ収容所を見て」というエッセイに記している。その中で、遠藤

はクラコフのホテルでフランス語訳の『夜と霧』を読んだと記している。『一冊の本』（雲華社、一九七六年）の中で、遠藤は「愛着の最も深い本」としてフランクルの『夜と霧』をあげ、「机からすぐ手に届く場所において、心弱くなった時間くことにしている」と告白している。⁽²³⁾ また、「カプリンスキー氏」（「野性時代」、一九七八年四月）という短篇小説の中に、クラコフにあるアウシュヴィッツに行く貨車の停車場は「フランクルの『夜と霧』の中に出ていた写真とそのままだ」という一句が見られる。『死海のほとり』の場合では、本文中の強制収容所に関するたくさんの描写は明らかに『夜と霧』の記述を下敷きになっているのみならず、前節において論じてきたように、「世界はどうして、こう……美しいんだろう」という言葉の背後にはフランクルの思想に対する深い理解がある。

『夜と霧』の他に、遠藤はエッセイ「人生の意味」⁽²⁴⁾において、「『夜と霧』を書いたV・E・フランクルの『それでも人生にイエスと言う』（春秋社）は我々に人生の意味を伝えてくれる充実した本である」と述べ、自分は「一読、再読したが、色々な点で感動し」た、と絶賛している。加えて、遠藤の晩年の創作日記の一つである「ひとつの小説ができるまでの備忘ノート」の中に、一九八二年頃にフランクルの『識られざる神』⁽²⁵⁾が記載されているということは小嶋洋輔の調査によって確認できた。以上の資料から、遠藤はフランス留学の時期から晩年に至るまでフランクルの著作を愛読している様子が窺える。

思想的な面においては、例えば遠藤のエッセイ「アウシュヴィッツ収容所を見て」の中の次のような話を見てみよう。

フランクルが『夜と霧』の中で書いた「ごく少数の人たち」。ガス室と虐待と飢えという文字通りの生き地獄のなかでも、なお自分のただ一つのパンを弱った仲間⁽²⁶⁾に与えた人たち。あるいは友だちのために命を捧げて餓死室で死んだ神父。「……」人、その友のために死するより大いなる愛はなし」聖書のその言葉は収容所の中でも実行された。フランクルはそれゆえに、人間からはいかなる極限状況においても自由は奪えぬのだと書いている。だからアウシュヴィッツを訪れた者は最終的に、「神はいるのか」という問にぶつかる筈である。そしてこの地獄の世界を見て「神などはいないのだ」というのも当然である。しかし、その地獄の世界の中でもコルベ神父や、弱った仲間⁽²⁷⁾にパンを与えた無名の囚人たちの存在を知るとき、我々はまた「神はおられるのだ」と叫ばざるを得ない。彼らが身をもって神の存在を証明したからである。

ここで、一見、遠藤はフランクルの言う「自由」を「神」に置き換えたかのように見えるかもしれないが、果たしてそうだろうか。フランクルにとつて、ロゴセラピーの理論を支えているのは正に「神の存在」である。例えば、『人間とは何か』⁽²⁷⁾の中で、フランクルは人間を「精神的自由を持つ決断する存在である」と定義した。つまり、動物のレベルを超えた本当の人間は、常に責任を持って決断し、自分に与えられた使命を果たして、各個の状況の意味を実現せねばならない。そして、「責任」の基準は個人の勝手な判断にあるのではなく、「人間の外にある一つの審判者の声を聞」き従う⁽²⁸⁾という「超越的人格」を持つ「良心」によるものでなければならない、と彼はいつも強調している。その「審判者」は

「神」であることはいうまでもない。このような意味で、彼の人間定義の中の「精神的自由」は、自己中心的な衝動を乗り越え、超越的な審判者に向けて、その声を聞き従う自由 (obey) であることは明らかであろう。繰り返しになるが、人間には「人生の意味 (meaning) を追求する意志 (will) の自由 (freedom)」があるというロゴセラピーの基本的理論仮説の背後に、神の存在が不可欠な前提なのである。

遠藤晩年の創作日記によれば、『死海のほとり』を執筆する段階で、氏はまだ فرانクルの『識られざる神』などの理論書に接触していない。しかし、「人間からはいかなる極限状況においても自由は奪えぬのだ」というフランクルの言葉から、遠藤は直感的に「超越的なもの」、つまり「神」に思い至った。これは決して偶然でもなければ、理論上の飛躍でもない。『夜と霧』におけるフランクルの人間精神の「自由」という概念から、その思想の深層にあるもの、つまり「神」とのつながりを、遠藤はキリスト教作家の視点で読み取れたに違いない。「自由は奪えぬ」と「神はおられる」という二つの結論の間にあるのは、人間存在の本質に対する理解におけるフランクルと遠藤との共鳴であると思われる。そして、本論の研究対象である『死海のほとり』において、「綺麗な世界」と「美しい世界」との間からも、両者の響き合いが聞えてくるのではないだろうか。

最後に、また『死海のほとり』に戻りたい。本作を収録した『遠藤周作文学全集』第三巻の巻末にある山根道公氏による解題(四三九〜四四三頁)において、『死海のほとり』の成立や主題のほか、作中人物のモデル、原型、及び作品を書く当時の作者遠藤の様子などが詳細に報告されている。これらの情報から、『死海のほとり』は作者遠藤自身の実生

活と極めて緊密な関連性を持つ作品であることが分かる。イエスの足跡を歩き直すためにイスラエルまで旅立った主人公「私」はそのまま、イエス像を探し求めるにあたって数回イスラエルを訪ねた遠藤と重なっているし、人気作家の設定もテレビCMにまで出演するほどブームを呼んでいた「狐狸庵先生」を想起させる。「十三番目の弟子」は「私」が自分の分身を主人公とした物語であるように、『死海のほとり』の〈巡礼〉も、遠藤が自分の分身を登場人物とした物語であるといつて差し支えない。

このような意味で、〈巡礼〉における旅の最後に、イエスとの関係を確立しなおし、「自分にとっての人生の意味」を見出した「私」と、現実において、『沈黙』(新潮社、一九六六年三月)から約七年間の探索を通して、「愛の同伴者イエス」というイメージに辿り着き、「自分の文学的出発以来の第一期の円環を閉じ」た遠藤と、両者とも、ある種の「人生の転回点」を迎えてきたといえよう。〈巡礼〉の「私」に、「美しい世界」という囚人の呟きを記した医師の手紙が救いの希望を与えてくれたのと同じように、現実において、「綺麗な世界」という囚人の賛嘆を報告したフランクルの『夜と霧』も、遠藤に重要なヒントや書き続ける勇気を与えてくれた可能性が当然考えられよう。ナチス強制収容所生還者であるヤコブ・イーガルというユダヤ人の医師から、ユダヤ人精神科医のフランクルを連想するのは不可能ではなからう。

おわりに

本稿はフランクルの『夜と霧』を手がかりに、『死海のほとり』第十

三章（巡礼 七）「ふたたびエルサレム」に出てくる「世界はどうして、こう……美しいんだろう」という言葉の意味を考察してみた。それによって、言葉の背後に、遠藤が持つフランクルの思想に対する深い理解があることを検証できた。また、僅かであるが、フランクルが創始したロゴセラピーの理論を援引して思想の面から遠藤文学にアプローチすることを試みた。

『死海のほとり』を読んでいるうちに、ロゴセラピーの理論と響き合うところが多く存在することが明らかになったが、紙幅に限りがあるため論述し尽くせない。今後も引き続き遠藤周作とフランクルの比較研究を試み、特に、「宗教性」をめぐる、遠藤とフランクルとの響きあいや相違点をより深く掘り下げていきたい。

注

- (1) 例えば、笠井秋生氏は『沈黙』から『死海のほとり』へ―遠藤周作の軌跡―（『梅花短期大学研究紀要』第二五号、一九七六年十二月）の注（4）において、遠藤が『一冊の本』（昭五一・一一、雲華社）の中で、フランクルの『夜と霧』は自分にとって「愛着の最も深い本の一つ」であると述べていることを指摘している。また、両作品の表現上の相似性を集中的に分析した先行論として、篠崎まどか氏「遠藤周作『死海のほとり』論―「巡礼」の章における〈同伴者イエス〉―」（『遠藤周作研究』第二号、二〇〇九年九月）及び菅原とよ子氏「遠藤周作『死海のほとり』論―イエス、ねずみ、そしてもう一つの祈りの旅―」（『九大日文』第一八号、二〇一一年一〇月）が挙げられる。

- (2) 一九四六年に刊行された、ナチスの強制収容所における体験記録『*Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager*』邦訳名は『夜と霧』。二種類の邦訳があり、旧版は霜山徳爾訳（みすず書房、一九五六年八月）。新版は池田香代子訳（みすず書房、二〇〇二年十一月）。本論文で用いるテキストは旧版の霜山徳爾訳のほうである。

- (3) 佐野利勝・木村敏訳、みすず書房、二〇〇二年一〇月。Der unbewusste Gott（一九四八）及び *Logos und Existenz*（一九五一）の二つの著作を邦訳して一冊に収めたものである。原著の出版社はAmandus Verlagである。

- (4) 原著タイトルは *AERZTLICHE SEELSORGE*。邦訳名は『死と愛―実存分析入門』（霜山徳爾訳、みすず書房、一九五七年四月）。

- (5) 山田邦男監訳、春秋社、二〇〇〇年七月。

- (6) 山田邦男監訳、春秋社、二〇一一年五月。

- (7) 先陣を切ったものとして、水谷昭夫氏の『死と愛の季節』（ヨルダン社、一九七四年一月）が挙げられる。

- (8) シュー・ウォルロンドゥスキナー『心理療法事典』（盛岡正芳・藤見幸雄ほか訳、青土社、一九九九年十二月）四六八頁、「ロゴセラピー」項目。
 (9) 「交錯する軌跡―遠藤周作『死海のほとり』論―」（『文学界』一九七三年九月号）

- (10) 「遠藤周作における「第三の世界」」（『国文学解釈と鑑賞』一九七四年七月号）

- (11) 注（1）を参照

- (12) 注（1）を参照

- (13) フランクル『絶望から希望を導くために』(原題 THE WILL TO MEANING — *Foundations and Applications of Logotherapy*, Expanded Edition A Meridian Book Published by the Penguin Group, 1988) (広岡義之訳、青土社、二〇一五年九月三〇日)を参照。一一四頁。
- (14) 山田邦男訳、春秋社、一九九三年十二月。
- (15) 『夜と霧』、霜山徳爾「訳」、みすず書房、一九五六年八月、一二四頁。
- (16) 『夜と霧』一二九頁。出典は新約聖書「ヨハネによる福音書」一章四―五節。
- (17) 『死海のほとり』の「側面」(『早稲田文学』一九七三年一〇月号)
- (18) 『死海のほとり』、救いの物語―隠れてある神に出会う信仰の旅(『キリスト教文学研究』第三二号、二〇一五年)
- (19) 神谷忠孝氏の評論『死海のほとり』(『国文学・解釈と鑑賞』一九八六年一〇月号)によれば、この場面は作者が「本当に書きたかった」『死海のほとり』のクライマックスでもある、という。
- (20) 「遠藤周作の留学―『白い人』に描かれたフランス―」(『遠藤周作研究』第五号、二〇一二年九月)。同「遠藤周作―救いの位置」(双文社、二〇一二年十二月)二二頁を参照。
- (21) 『フランクル『夜と霧』への旅』(平凡社、二〇一二年十一月)
- (22) 「新潮」、一九七七年三月
- (23) 注(1)を参照。
- (24) 遠藤周作『最後の花時計』(文藝春秋、一九九九年十二月)八五―八七頁
- (25) 注(3)を参照
- (26) 「遠藤周作と二〇世紀末の宗教情況」(『千葉大学人文社会科学研究所』十五号、二〇〇七年九月)
- (27) 注(6)と同じ。
- (28) フランクルの解釈では、「人間の超自我の背後にあるものは超人の自我ではなくて神なる汝である。なぜならば、もしも良心が超越者なる「汝からの言葉」でないとすれば、それは決して内在的なものにおける権威ある言葉ではありえないのである」という。(『識られざる神』七三頁)
- (29) フランクルは「自由」を「それから (Wovon) の自由」と「それに向かつて (Wozu) の自由」に区別している。前者の「それ」とは「衝動に駆られた存在」であり、後者の「それ」とは「責任を持った存在」である。(『識られざるか神』六一―七七頁)
- (30) 山根道公氏編「年譜・著作目録」(『遠藤周作文学全集』第十五巻、二〇〇〇年七月)によれば、遠藤は一九五六年一月―翌年一月、一九六九年一月―二月、一九七〇年四月―五月、そして一九七二年三月―四月、イスラエルに四回行ったという。
- (31) 遠藤周作「異邦人の苦悩」(『別冊新評』一九七三年十二月)

付記

本文引用は、すべて『遠藤周作文学全集』第三巻(新潮社、一九九九年七月)に拠る。

(に)い らくひ、広島大学大学院博士課程後期在学)